

「市民とともに『哲学する』とは？」

齋藤元紀 梶谷真司 小野原雅夫

小野原

私は福島大学の小野原雅夫と申します。本日の趣旨と内容を説明させていただきます。2015年に『現代日本の四つの危機』という本が出版されました。その前年の2014年に今回のファシリテーターの一人である齋藤元紀さんが呼びかけ人となって、あちこちから偉い先生方をお招きして高千穂大学で12回にわたる連続講義が行われました。私は錚々たるメンバーに気後れして固辞していたんですが、齋藤さんからどうしても誘われて断り切れず、けっきょく私は福島で哲学カフェをやっておりますので、「民主主義の危機と哲学的対話の試み」というタイトルの下、「てつがくカフェ@ふくしま」の話をさせていただきました。そのときの講師の一人が梶谷真司さんで、梶谷さんは「対話としての哲学の射程—グローバル時代の哲学プラクティス—」というタイトルで講義されました。その連続講義の内容が昨年、講談社メチエから出版されたわけです（齋藤元紀編『連続講義 現代日本の四つの危機 哲学からの挑戦』講談社メチエ、2015年）。私はその本で初めて梶谷さんのことを知って、今日が初対面なんですが、理事会の方から法政哲学会で何か企画を立ててほしいと依頼をいただいたときに、この3人で、哲学カフェをはじめとする哲学プラクティスに関するミニシンポジウムのようなことができないかと思い立ちました。ところが、3人で打ち合わせしているうちに、どうせならこの場で出席者の皆さんとともに哲学カフェを実践してしまおうということになり、今回こういう形になりました。

まず前半はファシリテーターである私と梶谷さんと齋藤さんの3人で対話形式によって、哲学プラクティスというのがどんなものなのかということを話し合っていきたいと思います。後半は、普通だったらいわゆるシンポジウム形式の場合は質疑応答となるんですけれども、そうではなく、皆さんにも哲学カフェの参加者として加わっていただいて、市民とともに哲学するというのはどういうことか、それにはどんな意味や可能性があるのかといったことについて皆さんと一緒に考え話し合っていきたいと思っております。今回は一般的なオープンエンド形式ということで、特に全員で合意しなければいけないわけでもないし、ここにいるメンバーが合意するなんてことはまったく想定も想像もできませんけれども、合意ではなくていろんな人がいろんなことを言って、それを通して一人ひとりの疑問や思考が深まればというふうに思っております。

対話のルールを簡単に確認させていただきます。まず初めに「お互いに対等な立場で話し合ってください」。参加者のなかにたとえば上司と部下、教員と教え子がいても、今日は皆さんほとんどそうだと思いますが、あくまでも上下関係を忘れて対等な参加者として話し合ってください。そして、哲学その他に関する専門知識があるかないかではなく、論拠の正しさによって対話を交わしてください。何よりも大事なのは「聞くときは最後まで聞き、話すときはわかりやすくまとめてください」というルールです。人の話を最後まできちんと聞くというのが哲学カフェではすごく大事なことになります。ただし、最後

まで聞いてくれるからといって一人で延々しゃべり続けていると皆さんの対話になりませんので、話す方はできるだけ簡潔にまとめていただければと思います。そして一人ひとりの「独白の応酬ではなく、対話となるように努力しましょう」。ほかの人が言った意見と関連させながら、お互いに質問しあったり、確かめあったりしながら話していただければと思います。

なにかここまででのご質問とかございますでしょうか。よろしければ哲学カフェを始めたいと思います。まずは3名のファシリテーターによる対話からスタートさせていただきます。では、齋藤さん自己紹介からお願いします。

齋藤

高千穂大学の齋藤と申します。専門の研究としてはハイデガーを扱っていて、哲学対話を始めた当初はそういう専門研究とは直接関係しないんじゃないかと思っていたんですが、最近では両者はある程度関連するところがあるのではないかと思います。思い直しているところです。

最初に哲学対話にかかわるようになったのは、小野原さんが世話人をなさっている「てつがくカフェ@ふくしま」に参加してからです。3.11の震災があつてその直後に、直後といっても半年くらい経っていたんですが、そのときに福島に入って「てつがくカフェ@ふくしま」に参加して、震災問題をめぐって市民の方々とお話を交わしました。震災で非常に苦しんでいる市民の皆さんの声も聞いたんですけども、他方ですごく興味深いなと感じたのは、まさしくそういう非常に辛い経験をしている最中なんだけれど、そういうときだからこそというか、いや、そういうときであってもむしろ人はものを必死で考え、それをしゃべるんだ、という点でした。震災は震災で大問題なんですけど、しかし何よりも福島の皆さんが懸命に考え、語る姿のほうにとっても強く胸を打たれたんですね。そこで哲学対話の楽しさに目覚めました。

そういう経験があつてから二年くらいして杉並区の高千穂大学に着任して、それが今から3年前ぐらいですか、そこで自分も学生たちと一緒に哲学対話をやってみたいなと思って、気楽な感じで始めてみました。簡単にできるだろうと思っていたんですが、最初は全然うまくいかなくて、学生が皆てんでに自分の経験をただただ語っているというそういう雰囲気、今から思えば対話という感じにはあまりなっていなかったと思います。ところがもうこの頃では学内で哲学サークルというのもできちゃいまして、学生たち自身が自分で運営をやってくれています。しかも対話のなかでは、お互いにそれなりに批判、というか攻撃ではなくてものごとをクリティカルな目で見つめながら議論を深めあうという、そういう思考も学生たちは結構できるようになってきていて、まあその成長たるや見ているところの方が圧倒される、そんな感じです。そうすると今度は哲学対話は哲学教育とか、ひろく哲学を学ぶといったところにどこかつながるような部分があるのかもしれない、と考えるようになってきました。いまは日本でもそういう点についても盛んに議論がなされていますけれども、そんな形で哲学対話とかかわり合ってやってきているといったところです。

それと、最近は銀座の方でも哲学カフェみたいなのを始めました。そこでは大学とはまた違った外の場所で市民の方々と対話をする、そういう活動をやっています。私はそんなところです。じゃあ、梶谷さんにバトンを渡します。

梶谷

東京大学の梶谷と申します。私が哲学対話に出会ったのは、現在所属している「共生のための国際哲学研究センター（U T C P）」の企画で、ハワイ大学と共同セミナーを行った際、子どもの哲学、Philosophy for Children（P 4 C）を実践している高校と小学校に行った時です。現地のP 4 Cのリーダーであるトーマス・ジャクソン氏と知り合う機会があって、彼に案内されて、カイルア高校とワイキキ小学校に行ってきました。

行く前はさほど期待はしていなかったんです。以前にそこに行った土屋陽介さんのレポートをネットで読んで、面白そうだとは思っていましたが、それだけでした。文章で読んで、どんなことが行われているか、全部わかっていて、それを実際に見ただけなんです、それでもすごい衝撃を受けましたね。高校生たちは、哲学の知識があるわけじゃないんですが、本当に素でお互いに話してて、あっさり哲学的な次元に話がいくんです。小学校では4年生のクラスで、みんなキャーキャー言いながらしゃべっているだけなんです。P 4 Cで大事なことは、自分が問いたいことを問うということなんですよね。普通私たちって学校で与えられた問いを考えているだけなので、自分で自発的に何かを考えているわけではないというのが、そのときにはじめてわかりました。子どもたちが出してくる問いなので、とても素朴でストレートなのが多い。「プライベートジェットがあったらどこに行きたい？」とか（アメリカらしい！）、「ドーナツ何個でも食っていいと言われたらどうする？」とかです。そうやって20人くらいの子供たちが思い思いにいろんな問いを出して、投票で決めるんです。だからどういう問いが選ばれるかは、先生ですらコントロールができません。そのときは「夢のなかから出られなくなったらどうする？」という問いが選ばれました。これは面白かったです。20分聞いてただけで、哲学のいろんなナントカ主義という立場がほとんど出てくるんです。あまりの勢いに圧倒されました。

日本に戻って、いろんなテーマで哲学対話のワークショップをやるようになりました。最初は、アメリカ人はしゃべり慣れているからうまくいくんじゃないか、日本では難しいんじゃないかと心配していたんです。でも、イベントでやっても学校でやっても、ほとんど変わりません。みんなよくしゃべる。やっぱり考えたいことを考えるのは、楽しいんだと思いました。学校だと、普段はできるだけしゃべらないようにして逃げるじゃないですか。だけど、考えたい問題なら、自分たちで考えてちゃんと話すんだということが分かりました。

もう一つ、P 4 Cはもともと学校教育のなかで出てきたものなんです、お互いしっかり話をする、すごく仲良くなります。やはりお互い話を聞く、話すことで、強い連帯感が生まれるんです。ジャクソンさんから聞いたのですが、カイルア高校というのはもともとハワイで最も荒れた学校だったそうです。それがP 4 Cを導入して、最初はお互いに向き合って話すことがすでに難しく、すごく緊迫していたらしいです。それがお互い顔を見て話すことでお互いを尊重しあえるようになっていったようで、比較的早く暴力が消えて、クラスの雰囲気がよくなっていったそうです。今やカイルア高校はハワイ屈指の優秀校になり、世界中から見学に來ています。教育としてすごくうまくいって、そういう面でもおもしろいと思いました。私もとにかくいろんなところでやってみようと思って、学校でも地方の村でもやっています。それで、どこへ行ってもやっぱり同じような効果が見ら

れます。

あともう一つ、僕自身は話が哲学的になるかどうかはあまり気にしていなくて、何にも盛り上がらなくても構わないと思っています。学校で哲学対話をやってよく起きるのが、発達障害のような子がまったく問題にならないんです。ある高校でやったときに、始める前にクラスの先生から「このなかにちょっと問題のある子がいるので気をつけてください」と言われて、何だろうなと思って対話するんですが、誰だかわからないんです。終わった後に先生に「誰が問題あったんですか？」と聞くと、「あの子です」と言うんですけど、その子はどっちかというとおもしろいことを言って、対話を盛り上げていた子なんです。そうすると、この子に問題があるってどういうことなんだと思うんです。私の対話のなかでは何も問題にならないのに、クラスでは問題になるわけです。だったら、「問題」ってその子にあるのか、クラスにあるのか、学校にあるのか、先生にあるのかよくわからないわけです。そういうのがおもしろくて、いろんなところでやってきた感じです。

小野原

ありがとうございます。私は2011年の5月から「てつがくカフェ@ふくしま」を開催しています。その前年に大阪大学臨床哲学出身の西村高宏さんが仙台の東北文化学園大学に赴任してきてすぐに「てつがくカフェ@せんだい」を始められたんです。前から哲学カフェというのはおもしろそうだなと思っていたんですが、仙台で始まったというのですね。行って見ました。その後、西村さんを福島にお呼びして哲学カフェってどんなものかという話をしてもらい、いつか福島でもやりたいなと思っていたら、西村さんが福島でも早くやれみたいなことを言われてですね。私としてはあちこちの哲学カフェを視察に行ったりしてちゃんとお勉強してから始めたいなんて思っていたんですけど、「いいからやっちゃえ」と急かされて、じゃあというので、すごく仲のいい高校教員である渡部純さんと一緒に世話人となって、2011年3月から始めようと計画して準備をしていました。ちょうどそこに東日本大震災、そして原発事故が起こってしまっただけで、予定していた建物は半壊で中に入れられないという状態になってしまいましたし、なんせ人っ子一人いない街になってしまっただけで、ここでやっても無理だろうなという感じだったし、カフェと言いながら安心してコーヒーを飲む水もないみたいな感じだったので、いったんは中止しました。その後復興はまったくと言っていいほど進んでいきませんでした。経済的復興よりももっと心の復興が必要というか、話す場がない、まさに「経験をしているのに言葉がない」という状況だなというふうに思い、何かしなきゃと思って5月から「てつがくカフェ@ふくしま」を始めることになりました。

最初のときは参加者は14人で、そのうち関係者が10人ぐらいいましたから、一般参加の方はたったの4、5人で、それでなんとか始まったんですが、第1回は本当に重たい雰囲気でした。みんな全然言葉にならない。しかも震災の話はするけれども、原発事故の話はだれひとりしようとしなないみたいな。そういう感じで哲学カフェは始まったんですけども、その後月1回のペースで開催しているうちにいつの間にか丸5年が経って、60回以上も続いて今日に至るという感じです。

僕はきちんと学ばないまま哲学カフェを始めてしまいましたので、今日はやはりまず哲学プラクティスっていう対話型哲学の全体像がどんなふうになっているのかという話を掘

谷さんに話してもらえるとうれしいなと思っているのですけれどもいかがでしょうか。

梶谷

私自身、哲学プラクティスの専門家だという気はまったくしていません。その道の専門と言えば、やはり立教大学の河野哲也さんです。彼がいちばんいろいろわかっていて、僕も最初彼から教えてもらいました。彼は教育学部に所属していることもあって、いろんな学校に関わっています。私自身はいろんな学校に行きますが、年に1回か2回だけです。毎週授業をもっていたり定期的にやっているわけではありません。むしろワークショップをいろんなテーマ、例えば「母」とか「お金」とか、あまり哲学で取り上げられないテーマでやってきました。あとは、地方の村の話し合いに行くというのもやっています。村って「長老」と呼ばれる人が大きな発言権をもっていたり、女の人と男の人は一緒の場ではしゃべらないとか、子どもは参加しないとか、若い人が何か言っても年配の人がダメと言ったらダメみたいな、やはりそういう社会なんです。それでは話し合いがうまくいかないので、何とかしてくれと言われて、対話の場を作るお手伝いをしています。

学校との関連で言うと、最近、高校の運営とか教育のサポートをしている教育系の社団法人の人に誘われて学校改革に関わっています。このあいだ、新入生のオリエンテーション合宿に行って300人を相手に哲学対話をやりました。そのために30人ほどファシリテーターを育成しました。さらに一部の高校では、教員研修を対話形式でやっています。先生どうして普段はほとんどコミュニケーションをとらないんですが、それができるようになれば、先生どうしが協力し合うようになって、お互いにこんなふうにやるとおもしろいんだよみたいに話して、クラス、学校の雰囲気がよくなって、結果的には偏差値が上がるというようなことが起きるだろうと思います。

あと、国際哲学オリンピック（IPO）というのがあり、それにも関わっています。IPOは、高校生の数学オリンピックの哲学版とでも言うべきもので、4年前からエッセイコンテストをやって、そこから日本代表を選抜して、トレーニングをして国際大会に連れて行っています。それは一般の人が入って行う哲学対話とは違うのですが、時代的な背景としてはやはり共通したものがあります。IPOに参加した時に知り合った先生に聞いたのですが、IPOや哲学教育は、旧共産圏が強いというか非常に熱心にやっているんです。なぜかという、共産主義・社会主義が倒れた後、経済的な面だけでなく、精神的な面でも、まったく安定した社会になっていないんです。だからいったい誰の言うことを信じたらいいかかわからない状態で、子どもたちがきちんと自分で考えられるようになることが、非常に切実な問題なんです。だから旧共産圏の子供たちはとても優秀です。日本はまだまだボーっとしてても生きていけるので、哲学教育が大事と言っても、それほど切実ではない。ある意味、恵まれているんだと思います。ただ、他方で日本も含めて西側の資本主義国でも、民主主義も資本主義も、無条件にいいという感覚がなくなって、結局なにがいいのか分からないという不安定さがあると思うんですね。そのなかで自分で考える力を身につけようというのは、世界的な流れとしてあるというのはそこで感じましたね。

小野原

ありがとうございます。もうすでに哲学教育の話、特に子どものための哲学（P4C）

の話になってきています。相談するなかで哲学教育をテーマにするという案も出たので、このまま哲学教育の話に進んでいってもいいのですが、今回は「市民とともに哲学するとは」というテーマを立てさせていただきました。「市民とともに」というとまずは哲学カフェになりますよね。とりあえず哲学カフェの話からしていきたいと思います。

僕は哲学カフェを毎月やっていて、今はこれが生きがいなわけです。もう楽しくて楽しくてしょうがない。「てつがくカフェ@ふくしま」では毎回世話人がテーマを決めて告知して、そのテーマに興味のある人に集まってもらってというふうにやっているんですけども、テーマを決めるときはこちらとしては一応こんな話ができたらいいなみたいにある種の流れを想定するのですが、もう始まった瞬間からそれをぶち壊されるみたいなことばかりです。そっちから来ますかみたいな。その目からうろこが落ちる感覚というのは学会での学びとはまったくレベルの違う話で、ああ一般の人たちってこれをゼロから考えろというところいうふうにいっちゃうのかみたいな、そういう学びがすごく多くてですね、そこがおもしろくて毎回やっているというところがあります。

ただそうすると、じゃあ自分が専門で研究している哲学プロパーの話と、一般市民の方々とやっている哲学カフェというのは、自分のなかでどう関わっているのかいないのかってというのは自分でもちょっと問題だなと思っているところです。私は専門的にはカントの実践哲学を研究しています。カント倫理学のなかでは定言命法と仮言命法が有名ですが、その両者はまったく対立するもので、ざっくり言うならば、定言命法がいいもので仮言命法はだめなものみたいなそういう分け方が一般的にはあります。けれども僕は自分なりのアイディアとして、定言命法という絶対的な命令があったとしても、それを果たすためには、そのための手段を命ずる仮言命法も必要だよなというふうに考えています。たとえば、民主制とか永遠平和というのは、これはまさに実現すべき理想なわけですがけれども、それらを実現するためにはやはりそのための手段というのをいろいろ考えなきゃいけないんじゃないのか。で、この哲学カフェというのを、理想を実現するための手段のひとつとして捉えてみたいと考えています。現代は民主主義が危機を迎えている時代だと思います。すべてを公論によって決すべしという民主主義の理想があったと思うんですけども、今の日本の国会ではだれもちゃんと話し合っていないくて、人が話しているときは寝ていて、議論を尽くさないまま最後は強行採決で決めるみたいな。そういうなかで本物の民主制って何だろうとか、それを再生するにはどうしたらいいんだろうということを考えていました。哲学カフェというのは本当に来たい人だけが来る、先ほどのルールに則って話し合いたいと思う人だけが来て話す場です。そういう場が日本中に広まっているとはいえ、それが民主主義の再生にどこまで役に立つのかというのは疑問に思っているところもあるんですけども、でもやっぱりあそこで話し合っていると、ああこれって何か今の日本の特に政治が見失っている何かがあるんじゃないのかなというふうに思っているところがあります。それが市民とともに語り合う、対話するということの真髄にあるのかなと思っています。哲学カフェによく来てくださる人がですね、このルールがすごいんだって言うんですね。ルールがあって、この場があって、ルールに則って話し合うというところが、これが今までの日本にはなかったんだというふうに言われるんです。本当に自由に話していい、そして最後まで聞いてもらえるという場が日本にはないんですね。そういう意味で言うと、確かに大学の哲学のゼミなんかでもちょっと先生の顔をうかがいながら、疑問に思った

ことを言わないでいたりとかすることもあったよなあって思い出したりもします。そのへん、齋藤さんいかがでしょう。

齋藤

そうですね。いま小野原さんがおっしゃったとおりで、やっぱり自由になんでも語っていいっていう場所が意外と、意外とというか、実はほとんどない。そういう場所を哲学カフェというのは提供しているんだと思うんですね。市民の方々とお話をしていると、たとえば職場の仲間内ではこんなことは話せないんだけど、この場所に来ると話せる。あるいは、ここだったらどんなことをしゃべっても否定はされないという期待と安心感をもっていられちゃうという方は非常に多いっていう感じですね。

ところがそういうふうに言うと、今日いられちゃっている方々の半分以上はたぶんある種の哲学専門研究を受けた方々なので、そんなゆるいことやっていてどうするんだみたいな、そんな感想を持つ人もたぶん多いと思います。そこで哲学の専門研究と哲学対話の関係をどう考えるかという点についてですが、ちょうど2週間前に日本哲学会のワークショップで哲学対話を扱いまして、そのときにちょっと聞いた話でなるほどな、と思ったことがあります。哲学研究をやってきた側の人たちにとっては、読書会みたいな場所で、ひとつのテキストを皆で頭を突き合わせて読んで、ああでもないこうでもないとうんうん言いながら議論をするというのは、わりとよくあることです。そうした場で、ロジックがきちんと組み立てられているかどうかとか、これをどう読むと筋がいいのかみたいな、そういう訓練を専門研究の人たちはすでにやってるんですね。そういう訓練を受けてくると、対話をしている場面でも結構適用できるように思います。この人の考えはこっちの方向に進んでいるけれどもこの部分が見えてないなとか、こういう意見が出てきたらじゃあ反対意見のこういう意見が当然出てくるだろうとか、そういうことがわりとうまく見抜けるんじゃないかと。そういう意味では、哲学を勉強している人たちがファシリテーターになって対話を流していく役回りを受け持って、どんどん自由な発想が出てくるように場をつくっていくことって結構できるんじゃないかなという気はするんですね。

ただ、他方でその「いや、俺は哲学を勉強しているんだ！」みたいな感じで権威性がガッと前面に出てくると一気に場が崩れてしまうというような、そういうところもあって。そういうさじ加減みたいなのが、専門研究の人と一般の市民の方々とがお話をするっていうときの落差になってくるんじゃないかと思うんですね。

もうちょっと言うと、たとえば哲学教育みたいな場所でもそうで、学校というような場所でやれば当然そこで学校という名の権威性というか、そういうものの構図のなかに哲学対話が強引に入れられてしまうという問題もある。自由に考えしゃべるとはどういうことなのか、自由に考えるということが学校の制度と抵触しない限りで成立していればいいのか、本来はそういう学校の制度みたいなものも叩き潰してしまうぐらいの自由な思考があっていいんじゃないかとか、ちょっと掘り下げるとそういう問題にまで広がってるんじゃないかな、というふうに思います。

梶谷

そうですね。たしかに日本で言いたいことを言えないというのはあるんですが、アメリ

カ人が自由にものを言っているかという、そんなことはないと思います。どの社会でもこういう発言がいいという基準が必ずあるんです。アメリカ人は最終的には「お前が間違っている、俺が正しい」というのを目指すんです。だから逆に弱気な発言とか「私は間違っているんです」みたいな話はしません。また、アメリカ人にとって「いい人」であるとか「頭がいい人」というのはとても大事なことで、そういう自分でいられるような発言をしようとします。別に自由に話しているわけでも安心してしゃべれるわけでもないんです。それをハワイのP4Cは崩したんです。本当にどんなことをしゃべってもいいというのは、別に弱気な発言だろうが間抜けな発言だろうがいいわけです。それで初めてお互いを認め合えるようになるんです。社会によって基準はいろいろで、表面的には発言の量は違いますが、私は日本とアメリカの違いはたいしてないと思います。

哲学者も例外ではありません。哲学ってマナーが大事なんですね。この人のここは批判していいけど、ここは批判しちゃだめだとか。ハイデガーは取るに足らないとは、やはり言うてはいけないわけです。哲学者はすごく厳密なマナーにしたがって議論を組み立てていると思います。そのマナーをわきまえないと、「まだ君はわかってないね」と言われてしまいます。哲学者も自由にものは言えません。

ファシリテーションに関しても、私の場合いま言ったことと同じで、哲学者だとここで行かないといけないみたいなステップを踏もうとするんですよね。だから、意外な飛躍はかえって難しい。だから僕は、哲学者がファシリテーションをやるといいこともあるけど、かえって狭めるようなところもあると思います。そういう意味では、ファシリテーターって、いわゆる技術とか知識よりも、本当に物事を知りたいとか、対話が好きという気持ちがある人がやるほうが、うまくいく場合があるように思います。

小野原

なるほど。哲学の問いつてある種答えがないじゃないですか。自我であれ、私であれ、それが何なのみたいな話になって別に答えがなくて、デイヴィッドソンもカントも皆間違っているかもしれないし。答えがない、あるいはあるのかもしれないけれどいまのところ誰も答えをわかってないっていう、そういう問題を皆で語り合うっていう意味ではまさに「哲学」カフェでなくてはいけなくて、哲学のテーマというのがそもそも許容性というか、包容力を持っているのかなというふうに思うところがあります。

逆に言うと、福島でやっているとどうしても3.11とか原発事故がらみの話っていうのはせざるを得ないし、どんなテーマでやっても必ずその話が出てきますし、毎年3月には「てつがくカフェ@ふくしま特別編」という形でちょっと大きめに原発事故の問題を扱うんですけども、原発事故とか放射線とかっていう話になると、じゃあ放射線はどれぐらいなのか、何ベクレル、何マイクロシーベルトなのかみたいな専門的な知識というのは必要となってきて、そうすると安全か安全でないかっていうのももちろんこれは主観的な問題なんですけれども、やはりどこまで食べていいのかいけないのかとかある種客観的な知識が必要とされるところが出てきます。そうするとそれを知っているか知らないかっていう問題になってきて、どうしても議論が自由にできないというところがあります。

他にも脳死臓器移植の問題を扱ったことがあるんですけども、これも単に脳死臓器移植という言葉のイメージで皆が勝手に話し出すともうぐだぐだになってしまいます。やは

り脳死ってなんなのとか、それに伴うルールのこととかを知っておかないと話せないというところがあって、そういう問題を取り上げたときほど対話がうまくいなくなるってことは感じているところがあります。それよりは、さっき母をテーマにしたっていう話があっていいテーマだなと思ったんですけども、そういう本当に皆がもっている経験だけで、それぞれの個々の経験だけを突き合わせて話し合えるようなテーマだと、これが非常に機能するしうまくいくのかな、自由とかそういったものが担保されるのかなというふうに思うところがありますね。

齋藤

そうですね。いまのお2人の話ともたぶん重なるところだと思うんですけど、一般の方々とお話をしたときにその発想の豊かさっていうものを、僕もやっぱり感じる場所があります。これはまた哲学教育のほうになっちゃうかもしれませんが、僕は授業のなかでも哲学対話を取り入れたスタイルにいま変えちゃっています。これは通常の授業のやり方とは正反対です。教員の皆さんはだいたい経験があると思うんですけども、ふつう今日はカントの授業をやるという場合なら、まずは純粋理性批判の説明をして、実践理性批判の説明をして、判断力批判の説明をしてみたいな、そういうプログラムを頭のなかで描いてそれに沿ってレジュメつくったりパワーポイントつくったりして、最後まで流していくわけですね。それで合間に適切な事例を入れて、たとえば直観形式の説明をするとか、そういうのをいろいろ考えるわけです。でもそれって結局のところ、もう最後にゴールが決まった芝居をあたかもわからないふりをするような役回りで、説明しながら学生たちを誘導していくという、そういうことをやっている。こちら側はいわば嘘をついているわけで、もう落としどころはわかっているのに何もわからないような顔をしながら導いていくわけです。けれども、学生たちと哲学対話の形でやり始めるともう話がどこへ飛んでいくか実はわからない。出たところ勝負という形で、思考が深まって予想以上の結果が出てくるようなときがあるんですね。

つい2日前ぐらいに浮気のボーダーラインってどこっていうのを倫理の授業で取り上げました（笑）。普段は寝てるような女の子がガッと目を開けて、「浮気!? そんなの絶対許せない!」みたいなことを熱弁してくれる。片や「肉体関係があったって浮気じゃないじゃない」みたいな学生がいて、その2人でお互い対話が成り立っていて、そこにほかの学生たちも徐々に入ってきて、議論が深まっていったんです。結局そこで最終的に出てきたのは、愛と性というのは切り離せる部分もあるとか、重なっている部分もあるとか、そんな相当深い話まで出てきました。でもそれは僕が導き出したわけではなくて、学生たちが自分たちで議論していくなかで引き出したものなんです。最終的にそれを哲学の学説の枠内でどう説明するか、というのはあとからいくらでもできるわけですけども、たとえば市民の方々とお話をするときもやっぱりそういう水準の話になることがあって、哲学的な議論に落とすか落とさないかは別問題として、そういう話がおのずと自由な発想のなかから出てくる、あるいはわれわれの予想をも超えるような議論の側面から話が展開する。そういうことがあるというふうに思いますね。

小野原

たまに哲学カフェに、ものすごく哲学に詳しい人がやってきて、専門的な言葉も使いながら話してくれることがあります。そうすると「ちょっと待ってください。いまの話はわかりにくいのでもうちょっと皆さんにわかるように簡単な言葉で説明してください」とお願いしたりします。哲学カフェはそれで終わるんですけど、そういう方はけっきょくその後来なくなっちゃったりします。やはり哲学のことをよく知っていて、専門的な話を聞きたい語りたいという人は、哲学カフェには合わないという面があったりするようです。そうすると、専門的にストローソンがどうのこうのとかいっただけのことを積み重ねてきたうえでの議論と、哲学カフェのように素で闘うっていうのかな、その両者の差はあって、僕はどっちもおもしろいと思うんですけども、ただ専門志向の人は哲学カフェのような対話にはあんまり満足してくれないってところはあるのかなと思います。そこらへんどうしたらいいんでしょうかね。

梶谷

僕は哲学対話をやるようになったのは、偶然の経緯があったとはいえ、もともといわゆる哲学に対する疑念もありました。哲学って「哲学の問題」があるじゃないですか、他者論とか存在論とか。そういうのって僕は、自然科学のように実験室でやっているのとあまり変わらないところがあると思うんです。要するに、問題をバラバラに切り分けて他者論は他者論としてだけ論じるわけです。だけど、私たちの生活のなかで他者だけが問題になることはないですよ。たとえば、友人関係とか夫婦関係で、友だちや妻とどうしてわかり合えないんだろうって、他者の問題でもあり、一緒に住むことの倫理の問題でもあり、この空間に一緒にいるという空間の問題でもあり、時間の問題でもある。全部絡まっているんです。それが哲学だと、他者とは何か、目の前にいるのが本当に他者なのかを論じるわけです。そんな問題、夫婦で暮らしていたら、どうでもいいです。他者の問題ってもっと切実で、もっとリアルでいろんなものが絡んでいる複雑なものなんだけど、哲学で論じると、突然スポンと切り分けられて論じられるのは、おかしいと思うんです。切り分けられる前のところから出発して考えているうちに、いわゆる他者論とか存在論になるということはあっていいんだけど、そのベースから切り離されたところで、これが哲学の問題です、これが大事です、これを知っておかなきゃいけませんって言われることに、ずっと違和感があったんです。それが哲学対話をやっている、最初のリアルな全体から始まるんです。

逆に哲学の専門の人も、自分が生きている現実、いろんな人たちと関わって生きているところに、自分が考えている問題がどう接続するのか考えるべきだと思います。それがないままやっていると、宙に浮いた思想にしかならない。そうすると、哲学って訳わかんないね、役に立たないねって言われてしまう。専門的な話をする人が来なくなるのは、そういう生の現実とのつながりに興味ないんですよ、きっと。抽象的で難しいことを言って、あなた頭いいねって言ってほしいんでしょう。そういう人は、対話に来る必要はないと思います。専門的な議論がしたければ、そういう人だけの集まりに行けばいい。それだけのことです。

小野原

ありがとうございました。このまま後半に入っていこうと思います。もうそろそろ皆さん話したくなってきたんじゃないでしょうか。手を挙げていただいたらマイクを回しますので、どなたからでもご自由にご発言ください。

参加者 A

私はいま哲学科で教えていますけどね、いまお話で聞いたことというのは大学の哲学でも本来当たり前のことだと思っているんで、逆にそうすると特に法政の大学院を出た方なんかは相当「専門教育」で苦しんだんだろうと思うんですね。私なんかは学部の哲学科のゼミだとか、ましてや教養じゃそういうことでやっていますからね。まあただ少数派ですよそれは。映像をバンバン使ったり、テーマとして原発の問題を扱ったり、そういうアップ・トゥ・デイトな事柄も扱っています。

そこで質問として、専門の哲学と哲学カフェでの対話というのはそんなに区別する必要はないのではないかとということです。私は学部時代からもう自由にやってみました。だから指導教官という人もいないんですよ。で、いま若い哲学の教員の方がドクター論文を書かなきゃいけないというのは実に気の毒だなと思っています。私の時代はドクター論文なんか書かなかった、そのほうが自由に哲学できますから。一人の哲学者に絞ってエネルギーを費やす必要もないので。私なぞヘーゲルやニーチェをやっている人間だろうと思われていますが、アリストテレスも中世哲学も新プラトン主義も皆おもしろいと思ってかじっています。私の頭のなかでは全部同等なんで、哲学というのは専門じゃないと思っているんですね。だからだんだんと哲学が大学のなかで制度化されていって、自由に対話する状態がなくなってきたのは気の毒だなと逆に思いますね。そういう意味で専門の哲学と哲学カフェでの対話というのは区別する必要がないし、自由な対話っていうのはむしろ大学のなかでやっていく必要があるんじゃないかと思いますね。

それからもうひとつ、哲学カフェという概念は、アカデミックに言う概念規定があまりなくて、なんか隙間の営みかなと思います。大学のアカデミズムじゃない。従来の市民が哲学する場としてのカルチャー文化でもない。お金を、授業料を払う必要もない。そんな感じがしているのですが、アカデミズムに合わせて言うと、哲学カフェの概念規定がないのかなということです。そこらへんで指標になるのがやはり対話、哲学的な対話っていうのはプラトンが言っていることですね。人文科学という形でテキストを厳密に読むという形じゃなくて始まっているわけですから、そのプラトンの対話との関係をどう考えるのかなと思います。プラトンの対話と同じ精神ですと言っていただければそれはそれでわかりますけど、そうじゃなければ何なのかなというのが第二の質問ですね。

参加者 B

先ほどバカなことを言ってもいいと言われて、すごくほっとしながら発言するんですけど、僕自身は哲学カフェとか全然行ったことがなくて、フランスにしながら全然行かなかったんですね。なんかバカにしてたようなところがあって行かなかったんです。でも、今日の話聞いてすごくおもしろいなと思いました。最初このタイトルを聞いたときに、すごく違和感というか、よくわからなかったんです。「市民とともに哲学するとは？」って、哲学する主体は誰なんだよちょっと思ったりして、市民が哲学するんじゃないくて、市民

とともにという、市民じゃない人が哲学するのかなとかいろいろ考えていたんですけど、先ほどの話で少しずつほぐれてきた気がしています。

それでちょっと僕自身考えて、皆にこういう考えでいいんですかって聞いてみたいんですけど、たぶん哲学科に入ってきたり、哲学をやろうとした人間も最初はすごく素朴な疑問っていうか、「これって何だろう？」とか、先ほど梶谷さんがおっしゃったように「なんでわかってもらえないの？」とかそういうところから始まって、それを一人で悶々と考えて本を読んだりしていると「あっ、この人はこんなこと言ってる」みたいな形でだんだん見えてくる。で、気がつくとなんか変な専門家になっちゃってそれぞれ「私はカントが専門です」とか「僕はサルトルです」とかそういう専門家みたいになってしまっている。哲学する最初のところからいつの間にか哲学研究、それもほぼ哲学史研究とか哲学者研究になってしまって、出発点の「哲学をする」という醍醐味を忘れてしまっている自分ときどき寂しさを感じるんです。だからさっきの話とかを聞いていると、原点に立ち戻れると思うんですね。

ただ、そこでもうひとつ、若いときってただ単純に友だちと「これって何だろうね」みたいな議論を延々としたりしていたわけですけど、じゃあなんで本とかに向かっていったかという、やっぱりなにか自分だけではわかんないようなことがそこに書いてあったり、あるいはいままでの知が凝縮されて整理されていたりとか、そういったところすごく大きな刺激があったんじゃないかと思うのです。で、具体的にこうやって話し合っているときにどこまでそういう刺激とかを共有できるのかなってというのがちょっとわからないんです。先ほどの話を聞いていて思ったのは議論することの効用ということで、ふだんはがんじがらめに、さまざまな内面化された規則とか、こうしなければいけないとか、こうしたほうが人によく見られるとか、そういったもので発言していて、自分の発言じゃないのが、哲学カフェだと自由になれる。これは先ほど酒井さんの発表にもあったようなこととすごく近いと思うんですけども、いまの社会のなかでそういうさまざまな規則とかそういうものが内面化されていて、自由になれないからそういう場が必要なんだっていうことまではなんとなくわかるんですけど、じゃあそれを超えて本当に哲学するっていうところまでそういう対話の場面だけでいけるのか。あるいはそこにもうひとつなんらかの、これまでの知の蓄積とかそういったものがあるわけだから、そういったものをうまく利用しながらそれからめていくことが果たしてできるのか。それとも、それをからめようとすると、そこは知をもってきて権力になるみたいなことになるのか。そのあたりが今日の話を聞きながら僕としてはすごく興味を持ちました。哲学するっていうことと、いわゆる哲学研究とはちょっと違うところをどうやって接続できるのかなというところがいちばん興味を持ったので、実際に経験された方とかの話が聞ければなと思いました。

参加者 C

大阪大学のCと申します。先ほど梶谷さんからお話ががあったように、大阪大学には臨床哲学研究室というのがあって関西の哲学カフェの拠点になっています。阪大ってちょっと不思議でそういう臨床哲学みたいな新しいことをやっているところと、いわゆる哲学科があって、僕はいわゆる哲学科のほうにいますね。テキストを読んで皆でゼミをやって、がやがややってわかんないですねって言って終わる感じの。

で、Aさんの哲学カフェと普通の哲学の授業の違いって何なんですか　ということに対する僕の考えなんですけど、いわゆる哲学科に身を置いている学生たち、僕の周りの学生たちの声を聞いていて思うのは「哲学にまでコミュニケーション能力を求めるのかよ」、「いい加減にしてくれよ」みたいな、「一人でやらせてくれ」みたいな雰囲気があります。実際僕も齋藤さんのやられている哲学カフェにお邪魔したことがあるんですが、本当に皆キラキラ輝いているわけですよ、学生さんたちが。で、ああいうのを見てみると、「あんなキラキラした学生さんたちの輪には入れないよ」と思う学生がいたとしても、まあ不思議ではない。しかもそういう人たちってたぶん哲学カフェには来ないし、僕たちの前には現れてこないわけですよ。市民の中で来たい人は来てください、たとえば大学の外のカフェでやるとか、大学のなかでも授業の外でやるんだったらまあ大きな問題はないと思うんだけど、それがたとえば高校とか中学校とかに制度的に組み込まれていったときに、まさにBさんが権力に転化するんじゃないかという話をされていたんですけど、コミュニケーション能力を強化せよみたいな感じの社会的な脅迫を強化する装置のひとつになってしまうかもしれない。そういったときに、Aさんがおっしゃっていたように、いわゆる一般的な哲学の授業でもそういう対話ができるっていうのはそのとおりだと思うんですね。ただ他方で、いわゆる哲学の授業でできて、哲学カフェにできないことっていうのは、やっぱり外の世界から遮断されて、ひとりでテキストの世界に没入するみたいなことだと思うんです。俺以外の誰にもこのテキストの意味はわからないみたいな勘違いをすることができるのが、いわゆる哲学科で得られることなのかなとも思っています。僕はわりとそういう学生だったので、僕が学部生のときに指導教員が「いまから今期の授業はすべて哲学カフェにします」なんて言ったらたぶん学校に来なくなったと思うんですよ。しかしながら、現在はそういう流れになりつつある。そういったときに、これは実践されている方々にも、哲学カフェに関心を持っている方にもお聞きしたいと思って今日来たんですけど、そういう哲学カフェを軽蔑している人たちがいて、しかもそれが僕たちの前に現れてこないときに、そういう人たちにどういう態度で接すればいいのかとか、どういう心構えで「いや、それでも哲学カフェをやります」と言えるのかということです。僕自身は千葉県で哲学カフェを主催しているので、いまでは哲学カフェ大好き人間になってしまっているわけなんですけど、ただ同時にネガティブな意見を持っている人の存在も意識しないといけないと思っています。どういう態度を取ればいいのかわからないので、Bさんの質問とも、Aさんの質問とも重なるところがあると思うんですけど、僕としてはそういう疑問を改めて皆さんに聞いてみたいと思います。

参加者D

社会人、一般人です。私が思っている哲学カフェとか哲学対話のイメージというのは、哲学対話にしても哲学カフェにしても、話すということは自分で主体的に問いを立ててそれについて考え、それについて話すということで、結論の出る出ないはさておいて、そういう主体的な行為なんだと思います。たとえば学校教育なんかでは皆何かを出せと言われて何を出したらいいかというのが決められていて、それはもう指示を待っているわけです。指示待ち症候群と私は、私だけじゃないけど呼んでいるんですけど、そういったことが教育の中にもあって、それは日本の社会の中にもある。

私事ですけど、企業に勤めているとやっぱりいろんなプロジェクトをやって、社長からは「どんどんイノベーションを起こせ」とかって圧力がかかってくるんだけど、そういうところに自分のアイデアを持っていったりすると、皆否定されてうまく思うようにいかない。そうすると、皆社長が言ったことをどうするかという指示待ちになっちゃうんですね。私はアニメーションのディレクターをやっているんで、これは演劇なんかでも通用することだと思うんですけど、一番致命的なことは主体性がなくなることです。そうすると作品はダメになってしまう。そういうことをいろいろ考えてみると、哲学対話ってなんて素敵なんだろうと思うんです。やっぱり自分で問いを立てるということや、それをまた他者と話し合う、そのときにもうひとつ素晴らしいと思うのは、場ができるということなんです。これは皆さんもずっとおっしゃっていたけど、場と雰囲気ができる。場というのはなんでも話していい場。これは会社ではできないですよ。今日の前半の話にも出てきましたけど、無意識の抑圧というのはあるんじゃないかと私は思っています。だから社長批判につながるようなことは絶対にしゃべらない。それは対話にならない。いいことばかりしゃべってるんだけど、いいことばかり言って自分の気持ちが入っていない。これは主体性が入っていない。だから、やれと言われたことを皆一生懸命やるんだけど、この作品を世に送り出したいんだというものすごい燃える情熱みたいなものがなくて、やってりゃ給料がもらえるというところがあるので、何もできてこないんです。クリエイティブではないんですね。そういうところで哲学対話を通してその場の雰囲気をつくりたい。私は企業でやってみたいと思うんですけど、そういう場の雰囲気をつくってお互いがなんでもしゃべれるということを実現して、それをずっと広げていきたいなみたいなことを思っています。

参加者E

法政の経営学部出身の者です。この前3月に梶谷さんのワークショップに出させていただきました。62年に法政大学を卒業して某メガバンクにいま勤めていまして、人材育成をやっているんです。それでワークショップとかいろいろ研修のネタを拾いたいからこういうのとかいろいろ出てきたんですけど、齋藤さんや皆さん方のお話を聞いていたら、哲学ってタコツボ化してるなって感じたんですね。ドイツ観念論とかフランス実存主義とかあるいは西田哲学とか、それでそういう人たちがワークショップに行くか、できるかできないかという、Cさんがおっしゃったような「ほっといてくれ」みたいな、「ハードコアでガンガンやっているほうが俺は好きだ」みたいな感じがありますね。それってなんとなく日本における大学、アカデミックな世界、哲学だけじゃなくてたとえば私の商売柄の経済学で言うならば、ミクロ経済学の学者に「先生、来年の日本の経済どうなりますかね？」と質問したら、「そういうことはマクロ経済の先生に聞いてくれ」って言われるのと同じ理屈なんですよ。それと同じで、たとえば同じ法政の哲学科の先生で実存主義と観念論と東洋哲学をやっている先生が終わったあとそこらへんの居酒屋に行って、何か議論したときに対話が成り立つのでしょうか。ディスカッション型の討論で「お前の考え方はおかしい」って相手を叩きのめすような話にはなるかもしれないけれども、それはダイアログではなくて、それこそ鋭い切り口でどっちの立ち位置のほうがいいかってガンガンやりあって、それでけんか別れするような世界になっているのかなと思います。

いまアニメーションのお仕事をされている方がおっしゃっていたとおり、職場でちょっとやってみようと思ってもまず無理です。自分の立場の保身っていうのに走るからできないんです。で、この場はなんでこんなにおもしろいのか、まったく会ったことのない人がボール投げたらポンポンいくのは、まず匿名性、サークルになっている、相手を個人攻撃しない、言ったことにすら責任を問わない、話を引き出してそれについてリレーするイメージでつながらなくてもいい、失敗してもいいっていうことで、だからリラックスだと思うんです。小野原さんが自由にジュース取ってきてくださいとおっしゃっていましたが、カフェって付いているのはリラックス効果があって、必ず質問とかしなきゃいけないというふうに責任を問われないからこういうカフェっていうのは成立するんじゃないかなと僕は思います。

興味あったもので梶谷さんの3月のワークショップに1回参加させていただいて、今日たまたまやるって見たもので、出身大学だから来てみたのですが、皆さんのお話を伺って、なぜうまくいっていったらそういうリラックス効果、あと先ほどもおっしゃったけれども話したいことが話せる、そして言ったことについてあとで責められるとか社会的地位が危うくなるということがないからうまくいくんじゃないかと思いました。

参加者 F

法政大学のFと申します。私自身こういう哲学カフェなどに参加したことはなくて、これが1回目の参加ということになりますけど、楽しいような感じはするんですけど、これは最後までいってみないと私は楽しかったか楽しくないかわかんないなって思いました。対話のルールとか、この哲学カフェがどこまで可能なかっていうのを私は考えていました。というのも、こういう場は、場も開けていて言葉を発してそれを聞いて、人がいるということが確認されるというのはいいんですけど、たとえば私の前に座ってらっしゃる方は私を見ることができないし、まあこれは物理的な関係なんですけど、その他、若い方と、僕みたいに20何歳とかそのぐらいのレベルの方と、すごい先生方とでレベル差もありますし、そこでこの哲学カフェをつくるときの暗黙の共通的な了解みたいなもの感じられなくもないというのが私の印象です。だからといって哲学カフェが不要というわけではないのですが、哲学カフェでどこまで本当に素晴らしい自由な会話ができるのかなっていうところが私の疑問でもあります。

参加者 G

法政大学のGと申します。皆さんのお話すごくおもしろいなと思って伺っていました。で、先ほど哲学カフェの意義とは何かっていうのと、普通の哲学科のゼミとかあるいはほかのたとえば井戸端会議の場とかと哲学カフェは違うのか、それとも同じなのかということについて考えていたんですけども、まず哲学カフェの意義というのはおそらく、ここで出た問題だとか議論だとかを自分の中で持ち帰ってテキストを読みながら内省をして研究を深めるというのは、一方ですごく重要なことだと思います。ただ、ここでしかできないことというのは、自分がまったく思いもしなかったところからボールが飛んできて、それに対して自分が専門用語を使わないで答えなければいけないとは誰も言っていないんですけれども、その専門用語を使わない、皆でわかるような形でどうやって話せばいいだろ

うっていうふうに自分で考えること、そういう場がここにあるということが哲学カフェのすごく大きな意義だと思っています。

そして、じゃあ哲学科の学生の議論と哲学カフェは違うのかっていうところなんですけれども、基本的には私も先ほどAさんがおっしゃったように変わらないというふうに思っています。ただ、そのなかで何が違うかということを考えると、まず哲学科の中にはそもそも哲学が好きな人が集まっているということで、先ほど小野原さんもおっしゃったようにある程度議論の幅が決まっているというところが特徴だなと思います。それとは違って哲学カフェというのは、先ほどアニメーターの方もいらっしゃって、経営学をやっている方もいらっしゃるし、あるいはもっとほかのスポーツ選手もいるだろうし、いろんな方がいらっしゃって、本当に多様な場からボールが飛んでくるところがすごく違うところじゃないかなと思いました。

で、先ほどCさんがおっしゃっていた「哲学カフェなんて必要ないよ」って思っている人に対してどういうリアクションを取ればいいのかという点ですが、私の考えたところでは「そりゃもったいないね、でも、あくまでこれは来たい人が来る場所だから、いつか来なくなったらぜひ来てください」って言うしかないと思います。無理やり「哲学カフェは必要です。だから皆でやりましょう」とはやっぱり誰も言えないし、言ったらそこに権力が働き、暴力が働いてしまうので言うべきではないというふうに思いました。

参加者H

いちばん拾い上げたいのは、Cさんがおっしゃっていた、哲学をいわば縦軸で深めていく方向と、それからこういう対話的なしかたでの哲学があったとしたら、一人で深めていくしかたでしか到達できない哲学的問いみたいなものをどういうふうに使うか、どういうふうに行方を考えるかっていうのが一つあります。難しいなと思いますけど。で、やっぱり哲学的対話みたいなものはなんかテーブルをひっくり返すようですけど、限界があるかなみたいな感じがしないでもないなっていうふうに思いました。

言おうと思ったことは皆Gさんにほとんど言われたので言うこともないんですが、なんというかな、僕は一応先生だから授業をやっていますけど、哲学対話っていうか、哲学カフェ形式ですか、もうガンガン取り入れてます。ガンガン話し合ってもらったりとかして。ただし、僕の授業の難しさっていうのは三段階くらいあって、一段階目は、全員必修の授業でやるという点。つまり、哲学なんて全然やりたくない人たちをいきなり引き込むっていうことの難しさが一点。第二点は、僕の授業を取ってくれた人。つまり、哲学する気だったり、あるいは哲学する気はないけど授業を取りに来てくれた人を相手にするというのが第二段階目。で、第三段階目がやる気満々の人たち。やる気満々の人たちは別にどうでもいいんです。どうでもいいっていうのも変ですけど、最初からできあがってるから、それをどういうふうにやればいいかさえ上手くいけばOKなんだが、この最初の段階はもう超つらいっていうか、もう嫌な役になってるっていうか、「なにあの先生、わけわかんないこと言ってる」みたいな。「うざいしやだー」みたいな。だけど「おもしろいんだぞ」って一生懸命おもしろがってみせて引き込むみたいな。「なんで世界があるんだよ」「俺の手がなんでここにあってこれが動くんだ」みたいなことを「こっちはハイデガーじゃなくてソクラテスはそう言ってるんだ」とかわけわかんないことを言ってみせる。そういうふ

うにしておもしろがらせて引き込むというふうに僕はやっています。僕のやり方はそれでいいんだが、なにを言いたいかっていうと、「市民とともに哲学する」ってあるじゃないですか。この場合の市民というのは、哲学やる気満々の市民ですよ。だからやる気満々の市民とともに哲学するのはOKです。ノープロBLEM。やり方はどうでもよろしい。まあどうしてもよろしくないが、適切なやり方をやればよろしい。だけど、問題なのはやる気なしのただの市民。というか普通、誰も哲学なんかやりたくないですよ、たいがい。だからそういう意味で「市民とともに哲学する」といった段階でもうワンランク超えてるんです、一つのハードルを。私の必修の授業はもうすごい大変。だけど選択してくれた授業は簡単なわけ。そこでなにが言いたいか。ひっくり返すと哲学って何っていうことです。哲学って普遍の意味だよ、普遍的って皆が当てはまるとかさ、だけどやる気ないやつがいっぱいいるし、やる気ないやつがいっぱいいる中で哲学って普遍的だって言ったってなんかむなく言葉が響いてくっていう感じなんですよ。そうすると、そもそも哲学的な問いって何なんだろう。初発の問いって何なんだろうっていうふうに思いつつ、俺はどういうふうに必修の授業を盛り上げたらいいかなみたいに思いつついる。だから、哲学的問いってそもそも何？みたいな。それは対話形式でなされるのか、それとも深堀型？ テキストとのいわば対話によって、ちょっと哲学史的にかつこよく言うと問答法的になされるべきか、それとも弁論術的になされるべきかみたいな。一方が他に向かって語る論文形式でいくか、それとも問答でいくかどっちなんだみたいな。というふうに悩むのであった。みたいな感じ（笑）。

参加者 I

法政の学生の I と申します。いまの話に関連してなんですけど、今回は「市民とともに哲学するとは？」っていうテーマだと思うんですけど、哲学カフェっていうのはまさに市民とともに哲学している場なのだろうかっていうことがちょっと気になりました。もしそうだとしたら、やっぱり必修じゃないと受けない、哲学の授業は必修でいやいや受けたり、哲学カフェにも行こうとしない人っていうのをどう考えるのかということと、逆にそうじゃないのだとしたら、ここはあくまで「市民とともに哲学するとは？」っていうことを問うて、まだ実際には市民とともに哲学するということが現実には起きている場ではないんだということだとしたら、実際市民とともに哲学するっていうのはどういう形でどこで実現するのかな、どういうビジョンになっていくのかなっていうのがちょっと僕はまだ想像できていないんで、そのへんが気になりました。

参加者 J

私はある高校の2年生で、たぶんこの中ではいちばん哲学の知識がない、いちばん市民に近い人だと思っています。で、Hさんのやりたくない人がいるっていうのを聞いててちょっと私も考えたんですけど、私ももとはやる気のない人だったんですよ。国語科の先生がなぜかデカルトとか言っているのを「なんだこいつ」って思いながら聞いて「誰だよ、知らねえよ」ってなってたんですけど、それがどうしてここに来たのかというと、なんていうんですかね、成績なんですよ。成績のことでちょっと落ちぶれて悩んでいたときがあって、で、そんなときにたまたまその先生をからかうつもりで買った哲学書を読んだら、

すごくいいことを言っているなと気づきました。全然知識とかなくて、今日聞いた講演も半分もわかんなかったですけど、でもなんかこういう形で哲学できるということをすごく喜んでいます。なにが言いたいのかっていうと、私の場合は成績のスランプでしたけど、そういう何か悩みを持った人に哲学って道を拓いてくれるものであって、あと似たようなことでいえば、哲学っていうのを気にしなくても生きていけるんですけど、いつか悩みを持ったときには哲学っていうものがすごい必要になることがあるなっていうのを考えています。で、そういう観点から見ると、やりたくない人のなかにも悩みを持っている人がいると思うんで、そういう人たちがこうやって自分の考えだとか悩みだとかを放出して、言いたいことを言って、私も言いたいことを言ってるんですけども、こうやるうちに哲学カフェっていうものにかかわっていくことができると思います。だから、そういう人たちがこうやって悩みを言っていけば興味を持てると思います。質問に答えられているかはわからないですけど、これも哲学カフェなんだと思っているので、自分の言いたいことを言えるっていうのも哲学カフェのいいところだと思っています。以上です。ありがとうございます。

小野原

ありがとうございます。ぜひ法政大学へいらしてください（笑）。

参加者K

法政大学のKと申します。私いま法政大学に通っているんですけど、公務員でもありまして、いま休職をして大学院に通っています。よく職場とかで見かけるのは、職場での会議とかになるとけっこう決まった人しか発言しなくて、まあなんか発言しにくい空気になって、言いにくくってちょっと思いついたけどこれを言うとかこの人の機嫌を損ねるかなとか、いろいろ意識しちゃって言えないんですけど、たとえばその部署から離れて研修センターみたいなところでやるような、たとえば自分たちのキャリアを考えると、そういうちょっと職場と全然関係ないテーマで研修をやったりとかすると、すごい皆活発に発言したりとかするんですね。今日の話を聞いていてちょっとそれも思い出したりとかしながら思ったのが、「市民とともに哲学する」ということの意義を考えたときに、市民がだれかっていったときに、ふだん自分は市民であると思って生きている人ってやっぱりいないと思うんですね。私のようにたとえば公務員であったりとか、会社員であったりとか、教員であったりとか、結構そういう立場っていうのが強くあって、僕もいまめちゃくちゃ緊張しているんですけど、それはたぶん法政大学の先生がいっぱいいて、先輩がいっぱいいて、同じ専攻の人がいっぱいいるので、やっぱりいま自分の立場っていうのをすごく考えながらしゃべっています（笑）。哲学修士1年なのにこんなこと言ってあとで説教するかとか思われちゃうかなとか。たぶんやっぱそういう立場があるのってすごい怖いことで、全然匿名じゃないし、公務員のくせにこういうこと言いやがってとか、いろいろ言われるんですね。ただやっぱり市民というふうになったとき、僕がもしいまここにほかの大学のイベントで来ていたとしたら、「法政大学のKです」とかってたぶん言わないと思います、ハードルが上がるので。そういう、市民であるというのはその立場を消しちゃうっていうところがいいのかなって思ったんですね。会社員であるとか公務員であるとか修士1年であ

るとか、そういう変な立場っていうのをいったん忘れて、まあ皆市民であると、皆同じ立場で、皆なんの立場でもないような人が集まっているので、なんかまあしゃべりやすいかなっていう。スベっても怒られないっていう、そういう立場を消してしゃべれるっていう自由を与えてくれる場っていうのがあると、皆急にしゃべりだすっていうのがあるっていうのは、まあその住民、日本人でもアメリカ人とかと同じように意外とマイクを渡してみたらしゃべるっていうのは、たぶんその立場を消したっていう条件があるのかなと思いました。

先ほど授業でやってみたら意見の幅が出なかったっていうお話もあったと思うんですけど、それなんかはたぶん皆さんが何何学部の学生であるということを過剰に考えすぎたんじゃないかと思いますし、先ほどその共通の暗黙了解があるんじゃないかっていう話もあったんですけど、それはやっぱり法政大学の学生として、この法政哲学会の哲学カフェでしゃべっていると、けっこう立場とか考えちゃうんで、たぶんいま法政大学の大学院生がこの場でいちばん手を挙げにくいのかなってちょっと思って（笑）。だから別の大学の人とかOBの方とか市民の方とかは、市民になれているのでしゃべりやすいんですけど、大学院生は市民にあんまりなれていないのかもしれないと思うんですね。だから、立場を消したうえでしゃべっていいよって言われるとすごい皆自由にしゃべると。そうすると、哲学プロパーの人にとってみたらけっこう斜め、右斜め上の方から意見が出てきて、それを「あ、なるほど、そんな球があるか」とかって考えたり。まあ市民からしたらたぶんその哲学っていうのも、哲学って何だっていう定義をあんまりよくわかんないわけで。僕の職場の人も「哲学やるのか？ 何をやるんだ？」みたいな感じで、なんとなくイメージとしては一歩引いてそもそも論とか考える程度にしか、市民というようなプロパーじゃない人はたぶん考えていると思うので、立場を消してちょっとふだんの立場から離れてしゃべるぐらいの感覚でしゃべるから意義があるのかなと思いました。そこに哲学プロパーの人が入って「ともに哲学する」という観点で言えば、そういう立場で自由になって皆がしゃべっていることを、哲学の知識を前提にしながら自分なりに解釈するっていうことにおいて「ともに哲学する」っていうところに意義があるかなというふうには思いました。ただ、しゃべること自体に抵抗があるっていう人は入ってこないかもしれないですけど、立場にがんじがらめの人にとってはすごく自由な場かなと思いました。

参加者 L

法政のLです。哲学カフェの意義という以前にこの対話のルールを読んで思ったのが、すべての哲学系の学会のパンフレットにこれを印刷して学会発表の質問のときにこれを回すといいんじゃないかと思ったんです。今回の哲学カフェがすごくおもしろい企画なのは、哲学の専門家ばかりが、まあそうじゃない方もいらしているので完全じゃないですけど、哲学プロパーの、哲学的知識のある人の率が高い会なわけですよ。で、どうなるかと思ったならなんかすごくおもしろくなっているんですけど、やっぱりこのルールのおかげであると思うんです。学会発表の質疑応答って人の話を聞かないで自分の言いたいことを長い時間取って話して、しかもそのうち人格攻撃みたいなことまで始まってきたりとか、マナーがなっていない。やっぱりCさんがおっしゃったとおりで、僕も含めて哲学科の人たちがテキストに沈潜して自分独自の世界にたどり着いて、それを人に伝えないのってもった

いないことなので、ぜひ共有すべき場が必要なわけです。学会発表なんかまさにそういう場なんですけど、なかなかそれができないという意味で、その沈潜するほうも開くほうもどっちもたぶん必要なんですね。どっちのスキルも身につけるべきであると思っているので。今回のこの哲学カフェの意義っていうのは、そういうのが不得手な人にそっちのスキルを開く会になるんじゃないかという、そういう意義があるんじゃないかと僕は思っていて、しかも実際そうやってきたのであろうということです。

参加者M

法政大学の大学院の修士に今年1年で社会人入学しましたMと申します。今日の哲学カフェの意義についてずっと考えていたんですが、「市民とともに」という言葉が、僭越ながら引っかかっておりまして。Bさんがおっしゃられたと思うんですけど、やはり私にはこちら側とあちら側、いまこのボアソナードタワーの26階で皆でカフェをやっているんですけど、ここからこう表を見て、下を見下ろしているような、そういう感覚を感じるんです。昨日広島でオバマさんが演説したときもweという言葉が使われて、よくオバマさんのスピーチではweが出てくると思うんですけども、やはりこの「私たち」という意識が大事なんですね。で、もし哲学カフェの意義が「皆で」という気持ちであれば、weという意識だと思うので、「市民とともに」という言葉はちょっと抵抗がある。もし「市民とともに」というのであれば、その哲学カフェの意義としては、ファシリテーターの人が意図として哲学を放り込んで、そこを皆さんと語り合って、またそこでファシリテーターの人がまとめるというように、哲学の意図を伝えるっていうのであればいいんですけど、先ほど企業で働いている方が哲学カフェを会社でもやりたいとおっしゃっていましたが、であれば哲学カフェじゃなくてもいいのかなと、哲学が付かなくてもいいのかなっていう気もしているんですね。まあちょっとその意義については、どんなところでもやれるよって私は根本的には思うんですけど、もしたとえば哲学を役に立たないものでなく、実践的に、もっと皆のよく生きてよく死ぬために使うものであるというふうに思うのであれば、でそれを皆で共有し合っていきたいのであれば、やっぱりこの「市民とともに」ではないのじゃないかなというふうに、言葉の形態的なものですけども、私はちょっとそういうふうな感覚を持っています。

参加者N

ではその哲学っていうのは何だと思いですか。

参加者M

私は哲学は、自分の中ではですけども、よく生きてよく死ぬための実践的な知恵になるような、歴史的な流れの中で哲学者の方が語られてきた言葉で、そこには選択肢はあると思うんです。でも哲学はまあ学問なんですけども、アカデミックな場でやる場合の学問はやっぱり一般的に役に立たないというふうに思われているんだから、皆でもっと広めていって、先ほど酒井さんが言われましたけど、もっと皆が幸福に、よりよく生きて死んで幸福になるためにはどんなものが必要なのかなっていう、その要素を自分のなかで一人ずつ選択できるっていう部分では学問なんですけど、皆でわかち合うためには、学問的な

ものはたまに出てくるので、あとは話し合いであればカフェっていうのはいいんですけど、「市民とともに」という言葉にちょっと引っかかるという感じですね。なんかもっと we の意識でいたいっていうか、それは自分の中にずっと内在していたものなので、誰かから聞いたからとかそういう経験的なものじゃないんですね。

参加者 O

Oと言います。私も「市民とともに」って最初気になったんですけど、withなのか throughなのかとか。で、主語が大学の哲学研究者だったら、変な違和感があります。自分は市民の中に入っていないのかという気がします。ただ、大学の先生がカルチャーセンターに行って哲学の話をするとか、哲学の講義をするとか、哲学させるとか、そういうことじゃなくて、私自身は「市民とともに哲学する」という以上は、自分も哲学するんだと思います。一緒に哲学するんだと思います。平場であるというか。ハイデggerとかに関してだと、いろいろ長く話さなきゃいけないことを専門用語だと短く捉えて言った気になります。私は本職は高校の教員ですけど、教えるときにいろいろ抽象的なことを言ってわかる子もいれば、もういろんなことを言い替えたりとか具体的な例をどんどん言って、どこまでわかりやすく教えるかというのをやるときに、本当にわかっていたら専門用語なしでもできるはずなんです。専門用語がなければハイデggerは語れませんっていう人はたぶんごまかしているんじゃないか、わかった気になっているだけじゃないかと思っています。

そういう意味では、いままでは本当に、たとえば悪いかもしれませんが、いろんな悩んでいることとかを自分だけわかりやすいやというんだったら、自分で哲学すればそれはそれでいいんです。ほかの人は哲学できないとか思い込んでいると思うんですけど、そんなことやってたら哲学は滅びると思っています。自分たちだけやってりゃいいっていうなら他の人から縁が切れると思います。上座部仏教って言ったら上座部仏教の人に怒られそうですけど、ほかの人と縁が切れてしまって、多くの人と誰もができる、誰もがしていることだということにつながっていかないと、孤立して見捨てられて、自分たちは頭がいいぞ、賢いぞ、皆がわかんないことをやっているぞと思っているのかもしれませんが、集団的に滅びる恐竜みたいなものだと思います。本来いろんな人と接してエネルギーをもらうものだと思うんです。人間生きている以上、哲学者だからといって浮気をしないとかですね、そんなやつはいなくて、親が死ぬとか、親が病気になるとか、介護するとかいろんな問題があって、いろんな一緒にテーマに悩むことがあると思うんですね。なので、そういう意味で私は「市民とともに」っていうのは、別に上から目線と思っていません。市民として生きていたら当然出会うということを話し合うのを「ともに」と解釈しています。

参加者 P

専修大学で哲学を専攻していますPです。この哲学カフェっていうのに来てみて、けっこうおもしろそうだなと思って来てみて、まあおもしろかったです。いえ、普通に面白かったです（笑）。自分は先月入ったばかりで哲学っていても、哲学ってなんなのかよくわかんないんですけど、とりあえず自分の興味を持っていることがなんか哲学に近いんじ

やないかなと思って入ってみたんです。前に哲学とかに興味を持って、ネットに哲学と打ち込んでみてもあんまり出てこないんですよ。ネットで哲学カフェって出てきたんですけど、ああおもしろそうだなと思ったら、福島とか書いてあって遠すぎて行けないなって思って（笑）。まあそう思ったので、これをやるのはすごくいいことじゃないかなと思います。

全然興味ないよって人とかはどうすればいいんだとかあると思うんですけど、そういう人は別に来なければいいんじゃないかなと思います。でも来たくてもなかなか近くになかったりとか、哲学が何なのか知りたい人もいると思うんで、そういう人たちを拾えるだけでもすごくいいんじゃないかなと思います。そうやって広まっていき、近くにたくさんできれば簡単に行けるようになるし、哲学カフェがなくてわざわざそこに行くということはちょっとハードルも上がるし、「あ、この人ちょっと意識高いのかな」とか思われると思えばそのハードルも低くなって行って、行きにくい、行きたくないっていう人も軽い気持ちで来られるようになるんじゃないかなと思いました。

参加者Q

短く話させていただきたいと思います。私は7年前にこちらの大学院の社会人入学に60歳になってから入らせていただいて、卒業しているわけなんですけど、仕事は臨床心理の団体の事務局で全体を束ねる仕事をしています。臨床心理学がやっている集団療法っていうのは、どこが違うのかなとフツと思います。今日のレジュメの中に「論拠の正しさによって議論を交わすようにしましょう」と書いてあって、一段上がった議論の場合の一つの特徴かなと思うことと、いろんな会議で行われている議論というものが、このレベルに達していないものが多いなということを日常経験しています。

私自身が哲学を少しかじってみたくなかったのは60歳で、もうすぐ70歳ですけど、自分はいったいなにをやっているのかと思って、自分のやっていることをもうちょっと精査したい、どういう意味があるんだろうというようなところから入って、いろんな仕事に携わっていますと、やっぱり態度表明をしたり、意思決定をしたりしなくちゃいけなくて、そのことの根拠っていうものがやっぱり必要になってくるなと思っています。で、こういう場で皆さんといろいろお話をし、やりとりを伺い、また自分もときどき話をしたくなるというようなことを経験しながら時間を過ごすわけなんですけど、ファシリテーターの方には、この混沌としつつもいろいろ考えているその人の思いというものを一段上がった言葉で言い直していただけるとすごく役に立つんですね、自分の考えていることが整理される。「論拠の正しさによって」という言葉を私は持って帰っていろいろ使わせていただきたいと思ったり、あるいは修論では僭越にもニーチェを読ませていただきましたけど、社会に作用点を持つという言葉が出ていて、それが非常に私にとっては大事でした。ご存じないと思いますが昨年の9月に心理カウンセラーの国家資格ができました。25年私はがんばってきたんですけど、そのときのエネルギーというのはこの社会の中で人の心というものに携わる人が作用点を持つべきだというふうに思ったというあたりで最後のエネルギーをふりしぼって作らせてもらったというか、がんばっただけなんですけど、そういう意味でごちゃごちゃと頭の中をめぐり、問題意識があるときにそれを洗練された言葉に言い直していただく、それがすごく役に立つというふうに思います。そういう場であってほしいな

と思います。

小野原

そろそろ時間がやってまいりました。残念ながらわれわれの力不足で一段上がった言葉で言い直すことができないんですけども、ここまで皆さんのお話を聞いてきて最後、梶谷さん、何か答えるべきことがあればお願いします。

梶谷

そうですね、たぶん「市民とともに」となっているのは、ここがいちおう哲学の学会で、哲学をやっている人が哲学カフェをどう考えるかということがテーマなのでそうになっているだけで、別に上から見ようとかいうことではなく、前提として参加者がどういうタイプの人かということで決まっているだけだと思うんです。いろいろ疑問、質問が出てきて、なんでお前ら答えないんだと思っておられる方もいるかもしれませんが、僕はあまり答える気はありません。それぞれで考えてもらえればいいかなと。やっぱり問いを見つけて持って帰るところかなと思っているので。

あと、僕がいつもワークショップをやるときに参加者の人に言うのは、自分が考えることがすべてであって、ここに来て楽しかったとか楽しくなかったって評価をする場ではないんです。楽しくなかったらその人の問題で、私たちはなんの責任もないと僕は思っているんです。だから、本当につまんなくて帰ったら、残念でしたというだけのことです。

なんか疑問がいっぱいあってすごいフラストレーションが溜まって帰るじゃないですか。僕はそれが考える力につながると思うので、欲求不満でよかったねっていうだけなんですよね。だから僕はイベントやって絶対失敗しないんです。つまんなかったら皆さんのせい、不満だったらよかったねっていうそれだけですから。本当に僕はもう皆さんからいろいろ出てきて、僕自身も考えなきゃいけないことをいただきましたし、よかったなと単純に思っています。

齋藤

そうですね、僕も今日どうなるんだろうと思ってけっこうドキドキしていて、やっぱりこういう場所で哲学カフェをやるっていうのは他でもあまりないと思うんですよね、学会のなかにこれを持ち込むっていうのが。だからどうなるんだろうと思っていたんですけど、まあ哲学カフェは結果はどうなってもオーライっていう考え方なので、まさに梶谷さんがおっしゃったとおりで、そういう意味では本日もすごいモヤモヤ感が残ってたぶん皆さんのフラストレーション度が、もうしゃべりたくてしゃべりたくてしょうがないみたいな圧がすごく高まっているのがわかるんですけど、これが非常にいい。そういう意味ではたいへんいい会になったなと思います、はい。

小野原

「市民とともに哲学するとは？」という問いを立てたのは僕です。実は「てつがくカフェ@ふくしま」でも毎回最終的に世話人は糾弾されるんですね。「この問いがおかしいんだよ」とか、「こんなふうに問うから考えにくいんだよ」とかって怒られてます。でもそ

ういうふうに話が進んでいったときほど思考が深まっていくので、まあその稚拙な問いが成功だったなというふうに自分を慰めて今日も帰りたいと思います。皆さま本当に最後までお付き合いくださいましてどうもありがとうございました。